

平成26年度DV防止啓発講演会

傷のそばにたたくむ～DVとトラウマを考える～

日時 平成26年11月22日(土) 13:30～15:30

会場 こうち男女共同参画センター 3階大会議室

講師：宮地尚子さん(精神科医、一橋大学大学院社会学研究室、医学博士)

兵庫県生まれ。1986年京都府立医科大学卒業。1993年同大学大学院修了。1989～92年アメリカハーバード大学医学部社会医学教室および法学部人権講座に客員研究員として留学。近畿大学医学部衛生学教室勤務後、現在一橋大学大学院社会学研究科教授。精神科医師。医学博士

【主要研究領域】

文化精神医学、医療人類学、トラウマと文化・社会、ジェンダー、セクシュアリティ論、生命倫理

【著書】

「トラウマとジェンダー」2004年 金剛出版、「トラウマの医療人類学」2005年 星和書店、「環状島＝トラウマの地政学」2007年 みすず書房、「性的支配と歴史」2008年 大月書店、「医療現場におけるDV被害者への対応ハンドブック」2008年 明石書店、「傷を愛せるか」2010年 大月書店、「子どもが性被害をうけたとき」(監訳) 2010年 明石書店、「震災トラウマと復興ストレス」2011年 岩波書店「トラウマ」2013年 岩波書店 など



★DV対策における課題

私は精神科医として、臨床や女性センターでの面談を通してDV被害者と接するうちに、こんなひどい暴力が家の中で起きていて、しかもそれが個人や二人の間での問題と思われ、社会的な問題として捉えられていないことにととても驚きました。

DVの種類として、身体的、精神的、社会的、経済的な暴力等があります。特に性的暴力については、恋人や夫婦間であれば性的な関係があることが当然とされているので、理解されにくいし、本人も言えない状況があります。さらに悪いことに、インターネットやスマートフォンの普及により、情報が脅しや復縁を迫る手段として使われるなど、加害者にとってやりやすい状況になっています。昨年ようやくストーカー規制法が改正され、メールも規制の対象となりましたが、驚くことにその中に特に若い人たちが利用するSNS※は入っていないのです。それほど、テクノロジーの進化に分析や対策が追い付いてないという現状があります。

※SNS…ソーシャル・ネットワーク・サービス。フェイスブックやラインなど。

★社会におけるDVの現状

内閣府男女共同参画局が3年に1回実施している「男女間における暴力に関する調査」では、結婚したことがある女性のうち3分の1は配偶者からのDV被害を受けた経験があり、そのうち10人に1人は繰り返し被害を受けています。DV被害の中でも特に身体的な暴力に限っても、女性の約4分の1に被害経験があり、20人に1人が命の危険を感じるほどのひどい暴行を受けています。さらに100人に1人が命の危険を感じるほどの暴行を何度も受けているという結果が出ています。

また、全体からすると割合は低くなりますが、女性から男性への暴力もありますし、同性のカップル間でも起きています。精神的な暴力やストーカー行為は女性にも多く、自分がその脅威になっていることに気付いていないということもあります。ですから、いつも男性が悪者で女性が被害者というわけではないということです。

★ DVとトラウマ

トラウマとは、心の傷のことです。この言葉は、1995年に阪神・淡路大震災とそれから地下鉄サリン事件が起きたことをきっかけに日常的に使われるようになりました。しかし本来のトラウマ体験というのは衝撃的で通常の適応行動では対処できない、つまり心が耐えられないほどのものを言います。語られず隠されることが多く、ちょっとそれに関わることが話題に出るだけでその場からいなくなったり、もうそんな話はしないでと思ったりします。

自然災害よりも対人的な被害の方がPTSDは発症しやすいと言われていています。自然災害も怖いことだけれども、でも対人的な方がその後さまざまな人間関係の中でも恐怖感を持ったりとかするのもあるって、PTSDの発症率が高くなっています。DV被害というのはこの両方に当てはまるんです。1回きりじゃなく何回も暴力を受けることが多いし、そういう暴力的な環境の中に置かれている時間が長いことが多い。そして、自然災害じゃなくて対人的だということがあります。

体の傷というのは目に見えます。血が出たり傷跡ができたり、でも、心の傷というのは目に見えないです。そして半ば不可逆で、今現在にも影響を及ぼしているようなものを言います。そしてトラウマ体験というのは衝撃的で、通常の適応行動では対処できない、つまり心が耐えられないほどのものを言います。トラウマ体験というのは語られなかったり、隠されることが多いです。日常生活の中で「こういうことがトラウマになっちゃってさあ、こういうの嫌なんだよね」とか「こんなもの食べられないんだよね」とかって言ったりすることありますよね。それは間違いではないんですけども、言葉でサラッと見え

ようになってきているのは、もうほとんど回復していると思った方がいいです。

★DVはなぜ傷つくのか

DVはトラウマの中でも特殊です。本来傷ついた時にいたわり合うはずの人から傷つけられるということは大きな問題です。例えば突然強盗に遭ったとします。それはとても恐い体験ですよ。そして家に帰ると「とても恐かったですよ」と慰めてもらったり抱きしめてもらったり、いろんな形で回復していきます。

しかしDVの場合は逃げ場がありません。安全な場所、そこで支えてくれる人や、「恐かったですよ。でももう大丈夫だからね」と言ってくれる人がいる場所がありません。むしろ、そうあるべき場所に加害者がいるのです。健康な生活や回復を取り戻すための場所がないということです。

また、信頼を寄せる大切な人、愛している人から傷つけられることで、「愛情」の意味が混乱するということがあります。愛情と支配を混同してしまうからです。「愛しているならなぜ僕のいう事を聞けないんだ」という風に相手に従うということが愛という言葉に換えられてしまう、相手の言うとおりにすることを愛だと言われてしまうからです。また、性的なかかわりを持つ人から傷つけられるという意味では、性の意味づけも混乱することがあります。

本来愛情というものは、お互いをいたわり合って相手が幸せになれるような状況をお互いに努力して作り合うものではないかと、少なくとも私は思っています。DVの当事者間では、この愛という言葉が、加害者にとって至極便利に使われています。

★被害者が声を出すために

トラウマは隠されてあまり語られることがありません。秘密を持ち続けることはとても苦しいことです。親しい間柄になっても、自分の一番つらいことを話せないという事は、それだけでもとても苦しいことです。家の中では暴力的なことが起きているけれど、外では誰にも話さないで元気なふりをする、そうした二重生活が続くと、何が現実なのか判断がつかなくなる場合もあります。さらに、語られない事によって暴力や支配が長期化してしまうこともあります。被害者が声を出すためには、自己尊重感や、他者・社会に対しての信頼感、時代や社会の状況、裁判での証言のためにも語ったり書いたり表現するということへの慣れが必要です。そして、聞いてくれる人がいるということ、被害者自身が声をあげることが他の人の役に立つという感覚が持てることも大きな力になります。

支援者の役割 支援者の役割としては、よい聞き手であることと、被害者の話を分かりやすい言葉で他の人たちに伝える翻訳者であることです。そして、被害者が語ることを促すことも大事ですが、語れない状態にある人にどう向き合うのかということも重要です。心に傷を負っている状態で話せと言われてもつらいですよ。何かつらいことを抱えているということを知ってくれる人がそばにいるというだけで落ち着きませんか。支援者には「何かあったのかな」と感じられる知識が必要です。そして、ただそばにいてくれるという存在であること。これは実はとても難しいことで、人間って何かしたくなってしまうものなのです。でも、逃げ出さない、ひかない、侵入しすぎないという距離のセンス、待つ力が求められます。それから、話をする気になっただけでも聞いてくれるという感覚は、支援者のサインを読み取る力や安心感を持たせる包容力、タイミングを読む力から生まれてきます。

それから、分かろうとしてくれる、聞いてくれるということもとても大事です。何でも知っている、分かっているという万能感ではなく、自分の限界を認識しながら共感する、忍耐力を持つ、規範にしばられないという感覚も重要です。

★DV支援の現場で

最後に、支援を継続するために、支援者も傷付くということを知っておいた方がいいです。支援者自身が傷ついて支援をやめるということも、それはそれでひとつの選択肢として持っていていいと思いますが、突然やめてしまう、長続きしないサポートというのは、被害者に見捨てられ不安を与えやすくなります。支援を継続するためには、支援者のセルフケアや、一緒に同じような支援をやっている人たちと相互サポートすることが重要です。休むことも大切な任務の一つです。休めないと長続きしなくなりますから。ちゃんとした栄養と適度な運動、睡眠をとること、自分の弱さを認めて無理をしないこともとても大事です。

傍観者でいる人たちともつながりを持ち、支援者を増やすことが、暴力に対して社会的な認識を高め、これからの支援やこれからの文化、社会全体をもっと生きやすくするのではないのでしょうか。